

4 教育研究組織

進捗状況報告

教育研究組織について、組織神学領域およびキリスト教文化領域における現在の状況は以下のようである。

(1) 組織神学領域については、2005年度より従来宗教哲学領域だった教員を正式に組織神学領域の主担当とした（ただし宗教哲学を兼ねる）。組織神学に係る授業においては、当該教員と隣接する実践神学領域の教員とが共同で担うことが定着しつつある。また他学部専任教員で組織神学領域の教員が授業を担当する例もある。例えば、組織神学領域の必修科目である「キリスト教教理の体系」において、2005-2006年度は、組織神学（宗教哲学を兼ねる）および実践神学それぞれ1名の教員が分担して開講したが、2007年度は他学部宗教主事（組織神学領域1名）が担当した。当面このような方法を取りながら適切に組織神学領域を充実していく。

(2) キリスト教文化領域については、2006年度に専任教員（宗教学・キリスト教文化・キリスト教美術を研究領域とする）を1名採用した。

教育への支援体制につき、教務補佐・教学補佐による授業資料の準備、授業のための視聴覚機材の設置・操作など最低限の水準を確保し得ているが、いわゆるティーチング・アシスタントの役割につき、具体的な授業科目や内容について将来構想委員会・カリキュラム研究委員会で検討を開始している。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

履修コース間での学部教員配置につき、履修コースごとに切り分けた配置を検討はしていない。いわゆる学科制度を取り入れてはならず、学生の収容定員の考え方と同様に、教員もすべて学部に所属している。それは1科目を1名の教員が担当するという既成概念にとらわれず、むしろ異なった学問領域に属する複数の教員が共同担当する授業形態を目指すという考えに基づくものである。

学内第三者評価

神学部が新たな理念に基づいて設置した「キリスト教思想・文化コース」は2007年度に完成年度を迎え、2008年春に初めての卒業生を出すことから、コース設立時の理念・目的や人材育成の目標がどのように実現しているか、カリキュラムは適切に機能したかなどについて具体的な検証を行い、来年度の自己点検・評価に記述することが望まれる。